

一次の文章は、好井裕明『違和感から始まる社会学』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には表記を一部変えたところがある。

「患者さま」という言葉がいま、病院などで頻繁に使われている。ちよつと考えれば、「患者」と言い捨てるのではなく、丁寧に「さま」をつけているのだと解釈できる。しかし、この言葉は、やはり不思議なものだ。「お医者さま」という言葉は、よく使われるが、「患者さま」という言葉は、私たちが慣れ親しんでいる言葉のなかにはなかったはずだ。

「患者さま」という言葉がもつ意味はなんだろうか。

医療や診療という営みを考えるとき、医者―患者という関係が基本になる。そして、この関係は対等で平等なものではなく、医者の側にさまざまな力が凝縮した圧倒的に

この 1 対称な関係を例証するものとしてよくあげられるのが、診察室にある患者と医者が座るイスの違いだ。医者はゆつたりとした肘かけがついたイスに座り、パソコンの画面を眺めている。他方、患者は、名前を呼ばれ、診察室に入ると、お尻がおさまる程度の小さな丸いイスに腰かけ、医者と向き合う。

丸いイスのほうが、患者の身体を簡単に回せて機能的だから、といえば、その通りなのだが、ゆつたりと座れるイスとちよこんと腰かける丸イスが、指示する者―指示に従う者というふうには、医者がもつさまざまな力の行使と、それを受け取るだけの患者という関係を、象徴しているのである。

昔テレビのニュース番組で、医者と患者の間に立ち、両者の橋渡しをする人びとのことを取りあげていた。診断や治療をめぐって、医者と患者の間でより密接なコミュニケーションを実現させるのが彼らの仕事である。その番組のなかでキャスターは、彼らの仕事は、あたかも同じ高さにある二つの場所に橋を渡すかのような説明をしていた。視聴者も、そうした説明に納得するのが自然だといわんばかりの印象を受ける番組内容だった。

2 こうした説明の仕方は、明らかにおかしい※レトリックにもとづいている。

医者と患者との関係をより密なものにするために、両者の間を調整するという営みは意義深いものだ。しかしそれは、圧倒的に高さが異なる場所に橋を架けるということであり、そのことで医師―患者の間にある落差や距離、傾斜などがすべてなくなるわけではないからだ。番組では、そうした問題が含まれた「架橋」であることを明らかにすべきだった。

「患者さま」という言葉が象徴しているものは何だろうか。

皮肉っぽくいえば、もうけを出してくれる対象にこびへつらい、丁寧に表現したものだろう。「お客さまは神様です」と同様に、「患者さまは（病気になることに、病院に貴重なお金を落としてくれる）神様です」というわけだ。テレビドラマなんかに出てくるような、※戯画化された悪徳医師や悪徳病院であれば、この解釈が当てはまるかもしれないが……。

そうではなく、この言葉は、医療、診療という営みがもつ本質的なことをおさえたうえで、医療をする側が、患者に対する基本的な姿勢とは何かを考え、なんとかして生みだした表現であるように、私には思えるのだ。

では、3 医療、診療という営みがもつ本質とは何だろうか。

それは、病氣やけがなどで自らの身体はどこかに問題が生じたとき、その部分の回復や治療のために必要な作業の判定や、治療のための行為を、医者という、自分の身体とは一切関係のない他者に「任せてしまう」ということである。

自分の身体や気持ちの問題については、まず自分でなんとか対応し、必要があれば、さらに処置し解決する―これは、私たちの日常にある「あたりまえ」な価値であり、自分という人間に対する重要な信奉であろう。しかし、自分でなんとかできないと判断すれば、他者にその処置を依頼せざるを得ない。医療や診療でいえば、その代表的な他者が「医者」である。簡単にいえば、私たちは病氣やけがを治すにあたり、医者に自分の大切な身体を「預けてしまう」のだ。

何をいつているのだ、医者に診てもらおうというのはそういうことだ、「あたりまえ」なことをいうな、という声が聞こえてきそう。しかし、自分の身体を見ず知らずの他者に簡単に「預けてしまう」という行為は、改めて考えれば、とても驚くべき

ことではないだろうか。でも私たちは普段、驚くべきことをさも「あたりまえ」のように実行している。

なぜかといえば、そこに医者という存在に対する「信頼」が息づいているからだろう。検査や薬を通して、自分の身体にさまざまな影響を与える営みをする主体に対して、「信頼」がなければ、営み自体成立しないだろう。

では、私たちはその「信頼」をどこから得て、どのように了解していくのだろうか。普段、私たちは「医者」への「信頼」をどのように語り、確認しているのだろうか。

ここで、**4 私自身の経験をたどってみよう。** かかりつけの町医者の例だ。

私はかつて、冬になり空気が乾燥してくると、よく熱を出した。冬の間、何度か医者の世話になっていた。熱が出て身体がだるく、普段とは明らかに異なる状態で、私は医者へ行く。医者は、型通りの触診、問診をし、喉の奥の様子を確認し、カルテに何やら書き入れ、注射する必要があるれば注射し、飲み薬を処方して、診察は終了する。いったい何をどのように調べられたのか、その内容はよくわからないままだ。

処方された薬を飲み、熱が下がるとほっとする。そこで「医者」への「信頼」は、私のなかでほぼ修正がないままに確認されていくだろう。

しかし、もし熱が下がらなかったら、どうだろうか。

もう一度医者へ行き、再度診療をしてもらい、「少し別の薬を出してみよう」と、別の処方箋で薬をもらうかもしれない。さて、もしそこで熱が下がったとして、私のなかにあるかかりつけの医者への「信頼」が揺らいだり、喪失したりするだろうか。

もちろんその場合もある。「もうあんなヤブのところには行かない」と怒る場合もあるだろう。しかしその場合と同じくらい「まあ、あの医者はヤブだし、それは前からわかっているからね」と自分を納得させ、「ヤブである医者」に対する「信頼」をそのまま維持することも十分にあり得るだろう。

日常的な「医者」への「信頼」のありようは、確固として説明できるようなものではない。いわばあいまいで、※恣意的で、多様な「信頼」のありようを、私たちは維持し、「信頼」するという営みをさまざまに行っているのである。

とすれば、私たちは、医療、診療という現実を目の前にして、「医者」の何に注目し、どのような部分を気にして、「医者」を評価しているのだろうか。

改めて「医者」という存在を考えると、こうした問いが、浮上してくるのである。

医者への「信頼」の根拠は何だろうか、と考えるとき、私たちは、専門的な知識の深さ、診断的確さ、治療行為の正確さや迅速さなどが、重要な判断基準になると思うだろう。

この基準は「信頼」をつくりあげるうえで重要であることは間違いない。しかし、私たちは、こうした基準だけを頼りにして、日常、医者と向き合い、医療・診療という営みのなかで、自らの身体を医者に「預けている」のだろうか。

そのことを考えるうえで、**5 医師の営みを「医者をする」と「医者であること」という二つの側面で見よう。**

「医者をする」とは、先にあげた基準に見合う営みであり、病気の診断や手術などの医療行為を専門的な知や経験的技量を背景にして実践することである。

他方、医者は単に医療的な行為を行っているだけではない。私たちと向き合うとき、ほぼ同時に「医者であること」をさまざまに実践しているのである。

何をいつているのかわかりづらいと思うので、例をあげよう。

名前を呼ばれ、診察室に入る。そこには医者が座っており、近くで看護師さんが何か準備をしている。「どうしましたか」と医者が私に語りかける瞬間、医者は私のことを「患者」として※カテゴリー化し、そのカテゴリー化に適したかたちで、私という他者に語りかけるのだ。

そのとき医者は、私にとって近所の知り合いでもないし、電車で※袖触れ合うアカの他人でもなく、まぎれもなく「医者」

として自らをもカテゴリー化し、私に語りかけているのだ。

私と医者のやりとりが続く。

「はい、また毎年の花粉の時期が来たので、薬をもらいに来ました」

「そう、今年は花粉の量が非常に多いそうですよ、早めに来られて正解ですね。ところで大学はいかがですか」

「まあ、相変わらずですが、学生にいまいち※覇気がなくて」

こうした私の日常生活とどこかでつながっているようなやりとりは、医者による医療行為の一環として了解できるだろうか。それは、落語の※まくらのようなもので、ネタに入る前に必要なことであり、落語を語っていることの一部だ——医療行為の一環だ、という声が聞こえてきそうだが、私はそうは考えない。

医者は患者を前にして、専門的な知や技量にもとづく専門家として登場すると同時に、私と同じ時間や空間を生活している「もう一人の他者」としても——私と多くのことを共有しているはずの「あたりまえ」の人間の一人としても、患者の前に立ち現われるのである。

私という一人の他者を目の前にして、もう一人の人間であり、他者である存在が、「医者であること」を私に対してどのように示し、語るのか。そして、「患者」として自分の存在をカテゴリー化している私と、どのような相互行為を実践するなかで、専門的な営みとしての医療を進めるのか。

つまり、医者という存在を改めて考えるうえで、私は医者が、どのように「医者であること」を語り示しながら、「医者をすること」——医療行為を実践しているのが気になるのだ。

さらにいえば、医療行為だけでなく、彼らがほぼ無意識にさまざまに実践している「医者であること」——言い換えれば「医者性」「医者らしさ」を批判的に把握することが、医者と患者という関係を考えるうえで、重要ではないかと考えているのである。

※レトリック：ここでは、話のすじみちの立て方のこと。

※戯画化された：おかしく皮肉られた。

※恣意的で：その時どきの思いにまかせた。

※カテゴリー化し：分類し。

※袖触れ合うアカの他人：偶然出会うことになった他人。

※覇気：ものごとを自分からやりとげようとする気持ちや意気込み。

※まくら：前置きにする話。

問 1

1

に入る最も適当な漢字を1字で答えなさい。

問 2 — 線 2 「こうした説明の仕方は、明らかにおかしなレトリックにもとづいている」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア キヤスターの説明は、医者と患者の立場の差を変えることができないにもかかわらず、まるで両者の立場の差をなくすことができるかのような考えにもとづいていたから。

イ キヤスターの説明は、医者と患者の立場の差が大きくひらいているにもかかわらず、まるで両者の立場が平等になるかのような考えにもとづいていたから。

ウ キヤスターの説明は、医者と患者の立場の差が座るイスによって変わるにもかかわらず、まるでイスの違いは立場の差に影響がないかのような考えにもとづいていたから。

エ キヤスターの説明は、医者と患者の立場の差がはつきりしているにもかかわらず、まるで両者の立場が対等であるかのような考えにもとづいていたから。

オ キヤスターの説明は、医者と患者の立場の差を近づけることができるにもかかわらず、まるで両者の立場の差を変えられないかのような考えにもとづいていたから。

問 3

— 線 3 「医療、診療という営みがもつ本質」とあるが、それはどういうことか。80字以内で説明しなさい。

問4 — 線4「私自身の経験をたどってみよう」とあるが、筆者はこの経験を例にあげて、医者に対する「信頼」とはどのようなものであると説明しているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 医者の診療を受けて一度で体調が回復すると医者への信頼は再認識にんしきされるが、一方、一度で体調が回復せず再度診療を受けて体調が回復した場合、医者に対する怒りの気持ちから医者への信頼が揺らいでしまうことが多い。このように、医者への信頼は不安定で維持されるのは難しいものであるということ。

イ 医者の診療を受けて一度で体調が回復すると医者への信頼は確認されるが、一方、一度で回復せず再度診療を受けて体調が回復した場合、診療の内容によって医者への信頼が失われることもあるが、さまざまな理由をつけて信頼が十分に保たれることもある。このように、医者への信頼はあいまいな形で持続されるものだということ。

ウ 医者の診療を受けて一度で体調が回復すると医者への信頼は積み重ねられるが、一方、一度で体調が回復せず再度診療を受けて体調が回復した場合、医者に対する気づかいから医者への信頼が保たれることも十分にある。このように、医者への信頼は変わることなく持続されるものであるということ。

エ 医者の診療を受けて一度で体調が回復すると医者への信頼は再確認されるが、一方、一度で体調が回復せず再度診療を受けて体調が回復した場合、医者の診療に対する疑問から医者への信頼が失われてしまうことが多い。このように、医者への信頼は不安定で持続されるのは難しいものであるということ。

オ 医者の診療を受けて一度で体調が回復すると医者への信頼は確かめられるが、一方、一度で回復せず再度診療を受けて体調が回復した場合、怒りによって医者への信頼が揺らぐこともあるが、その時どきの思いによって信頼が保たれることも十分にある。このように、医者への信頼はあいまいな形で持続されるものだということ。

問5 — 線5「医師の営みを『医者をする』こと」と『医者である』こと」という二つの側面で見ている」とあるが、筆者は「二つの側面」をもつ「医師の営み」についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 医者の専門的な技術だけでなく、患者と同じ場で過ごし親密な関係にある医者が、患者とのやり取りによってどのようにして患者を受け入れていくのかを、注意深く観察し理解することが大切である。

イ 医者の専門的な技術だけでなく、患者と同じ時間を過ごす特別な存在である医者が、患者に対する無意識の声かけによってどのように人間性を示すかを、注意深く観察し理解することが大切である。

ウ 医者の専門的な技術だけでなく、患者と同じ一人の人間である医者が、意図していない振る舞いによってどのように医者らしさをあらわすのかを、注意深く観察し理解することが大切である。

エ 医者の専門的な技術だけでなく、患者と同じ空間を共有している医者が、治療行為によってどのように患者から人として信頼されていくのかを、注意深く観察し理解することが大切である。

オ 医者の専門的な技術だけでなく、患者と同じ時間を過ごす他者としての医者が、患者への計画的な声かけによってどのように医者性を示すかを、注意深く観察し理解することが大切である。

二次の文章は、ドリアン助川「台風のとて」の一部である。中学三年生の雅之君は元イラストレーターでホームレスの皆さんに、たびたび絵の手ほどきを受けていた。バンさんから絵の新しい可能性を学び、ますます絵画にのめり込んでいく雅之君。そんなある日、多摩川周辺が大型台風に襲われる。橋の下で暮らしていたバンさんを心配する雅之君は河原に向かった。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には表記を一部変えたところがある。

わずかな水溜まりのなかで、ザリガニが泥の輪を作った。まわりは干上がっている。雅之君はザリガニの尻尾をつかんでバケツに入ると、また流れまで運んでいった。すると途中で深い泥にはまり、制服のズボンを汚した。泥だらけのバスケットシューズは自分で洗うつもりだったが、ズボンは自信がなかった。母親がぶち切れた時の、半ば悲鳴のような声を雅之君は覚悟した。

バンさんに会わなくなったのも、母親のその声がきっかけだった。

橋の下にいる雅之君を偶然見かけたという近所の人から、ご丁寧にも電話がかかってきたらしい。母親は問いつめてきた。しばしの沈黙のあと、雅之君は答えた。ホームレスのバンさんと空き缶をつぶしていたと。

1 迷いはあったが、雅之君が正直なことを言ったのには理由があった。

教室でも美術部でも、雅之君が一人浮いていることを母親は常々心配し、口にした。だから、親しい人ができた、安心していいよという意味で言ったのだ。しかし母親は「なぜあんな人たちと！」と叫び、そのまま顔を覆って泣きだしてしまった。

「なんで？ 自分がなにをやっているのかわかっているの？」

雅之君はうろたえた。ホームレスにいい感情を持っていない人たちがいることを雅之君は知っていた。雅之君だって、バンさんと初めて言葉を交わした時は恐かったし、緊張した。でも、ここまでの反応を見せる母親が雅之君には理解できなかった。まるで犯罪者呼ばわりだった。バンさんとき合っていると自分が自分でも、母親は許さなないといった目の色で見るのだっ

た。

「だって、絵も教えてもらったし」

「なんでホームレスに絵を教えてもらうのよ！ なんのために美術部に入っているの？ どうしてなにもかもそうなの！」

母親の顔は憤りで茹だっていた。

「だいたい、なんでいっしょに缶をつぶしているわけ？」

どう答えばいいのか、雅之君は言葉が浮かんでこなかった。ただ、バンさんを訪ねていった時に、みんなが缶をつぶしていた。だから手伝ったとしか言いようがなかった。

「缶がたくさんあったから。手伝おうと思って」

「そういうの、偽善っていうのよ」

「だって……」

「ああいう人たちを助けようとか、どうしようとか、そんな運動やって社会にたてつくような人間にならないでちょうだいよ。もう、信じられないわよ。学校で友達もできないくせに。馬鹿にされているくせに！」

母親は自分の言葉に興奮したのかまた泣きだし、そのままテーブルに突っ伏した。雅之君も涙がこぼれて仕方なかった。実の母親だけに、テーブルの向こうとこちら側の、その途方もない距離感に息が詰まりそうになった。

母親は帰宅した父親にもまくし立てた。父親は難しい顔でビールを呑み、雅之君をそばに座らせた。父親は母親のように取り乱しはしなかったが、逆にひとつひとつの言葉を重そうに放った。雅之君はまたうなだれることになった。

「人として、こういう見方が間違っているのは、お父さんにもわかるよ」

父親はそういう前置きをした。

「こんな時代だから、生きてりやいろいろある。ホームレスになつてしまう人もいるだろう。でも、はつきり言おう。一生懸命

真面目に働いていれば、人はホームレスなんかにはならない。これは事実だ。どこかであの人たちには油断というか、怠惰な時期があったんだろう。もちろん、だからといってあの人たちを見殺しにするような国ではないけどね」

そんなふうには言って欲しくないと雅之君は思った。植物の根といっしょだった。見えない人には見えない。でも、自分には見えていると思った。

「あの人たちが盗みを働いているという噂もある。やむにやまれずの場合もあるだろう。お父さんだって同情はするよ。でも、お前には一切関係ないことだ。お前は学校にも塾にも行っているんだから、まずそこで友達を作れ。その方がいい。だからあの人たちには今後一切近づくな」

父親はそう言って約束を迫った。雅之君は無言で下を向いていた。なにか言い返そうとすると、母親のように泣きだしそうだった。自分のことを悪く言われるより、空き缶を集めるしか生活の糧がないバンさんたちが、犯罪者呼ばわりされていることがたまらなくいやだった。でも、それを訴える言葉が雅之君にはなかった。どうにもならず、雅之君は父親の顔を見た。

「なんだ、その目は」

父親の声が大きくなった。雅之君はまた下を向いた。

「約束できないなら、お父さんの方からその人に言いに行かないといけないな。あるいは警察に相談するか」

警察？

父親はいったいなにを考えているのだろうと雅之君は思った。

だが結局、雅之君は父親の圧力に折れたのだった。2 力なくうなずき、「もう会いません」と小さな声で答えた。

どこから流れてきたのか、軽自動車がひっくりかえっていた。フロントガラスが割れ、運転席にまで泥が堆積していた。雅之君は軽自動車のなかを覗き、それから橋の方を見た。

この水の力。大気のエネルギー。濁流は土手ぎりぎりまできたのだから、橋の下にブルーシートの小屋が残っているはずもなかった。バンさんたちもきつとどこかに避難したに違いない。それでも、もしまたこのあたりにバンさんたちが戻ってきているとすれば、雅之君が考えつく場所は橋の下しかなかった。

泥を踏みながら、雅之君は一步步つ橋に近づいていく。

親と約束した以上、あれ以来河川敷には足を踏み入れていない。それは雅之君にとって大きな我慢だった。そしてその分だけ、雅之君は憑かれたように絵を描き続けていた。

1 受験勉強で目の色を変える同級生が多いなか、雅之君は美術部の部室で夏休みの大半を過ごした。家にいるより平和だったし、絵に向かうことで B ささくれ立っている自分から目をそむけることができた。

雅之君は、3 バンさんに教えてもらったものの見方を、技術として具体化することに熱中していた。その方向性のみを自分の指針にし、作品を描き続けた。校庭の隅の植えこみから雑草を引き抜いてきては絵筆を握った。大胆に描かれた根が躍り、花や葉を脇に押しやった。だれが見ても新しい印象を受ける植物たちの姿がそこにあった。

美術部員たちの間でも雅之君の作品は徐々に評判になっていった。普段は押し黙っている雅之君だけに、その絵を囲むみんなの声はかえって大きくなった。男子女子ともに「すごいね」と集まってくる。顧問の先生も熱を帯びた口調になった。

「理科の資料図みたいだけれど、描く側の目で生まれ変わっている。こりゃ、アートだ。おい、雅之、どこで思いついた？」バンさんとの間で起きたことを話そうとは思わなかった。話せば興味本位でいろいろ訊かれるに決まっている。雅之君は笑みを浮かべながらも、新たに得た「目」についてはなにも語らなかった。

ただ、孤立しがちだった雅之君にとって、4 周囲のこの変化はとても大きな意味を持ち始めた。日々の色合いが絵の具を並べたように鮮やかになっていった。生涯をこの道にかけてもいいと雅之君は初めて思った。顧問の先生は雅之君の作品を何枚か選び、コンクールに送った。雅之君の胸のなかには、いつの間にか夜明けの金星みたいな輝きが宿るようになった。もうこ

うなったら、親がなにを言おうとバンさんにまた絵を見せに行こうと思った。

そこに突然の濁流をぶつけてきたのが今回の台風だった。十年に一度の大型台風だとテレビは報じていた。多摩川の土手沿いには消防車が並び、警戒水位を越えた場合は強制避難もあり得ると繰り返しアナウンスしていた。

そして、警告された通りの大型台風がやってきた。激しい雨が半日も降り続き、家が揺れるほどの風が吹き荒れた。まさか逃げ遅れていることはないと思つたが、雅之君はバンさんたちの安否を気づかった。暴れ狂う風の音を聞きながら、雅之君はまんじりともできない夜を過ごした。

台風が去り、天高い青空が現れても、雅之君の胸のなかにはまだ強い風が吹いていた。橋の下がどうなっているのかとても心配だった。あの場所だけでも見に行こうと雅之君は思った。親の顔がちらついたが、とにかくそれは自分で決めたことだった。

そんななか、ちょうど給食の時間にそれは起きた。

美術部の顧問の先生が「金賞！ 金賞！」と叫びながら教室に駆けこんできた。なにごとかと担任の教師は立ち上がった。教室もざわめいた。すると顧問は、雅之君の絵がコンクールで一位を取ったこと、副賞としてパリに短期留学できる資格を得たことなどを興奮冷めやらぬ口調で語った。教室のすべての生徒が立ち上がり、一人離れて座っていた雅之君に拍手を送った。

橋はすぐ目の前にあった。バンさんと顔を合わせたら、どんな言葉をかければいいのか。そればかりを考えていた雅之君は、風景がすっかり変わってしまった橋の前で立ち尽くしていた。

橋の下には流木が積み重なっていた。凄まじい量だった。そこにあらゆるゴミや灌木、自転車などが引っかけかり、無惨な※オブジェとなつて空間の半分をふさいでいた。人影はどこにもなかった。風が吹く度に、その巨大な残存物はビュッと奇妙な音を立てた。生まれなくなかった怪物が、自身の姿を知って泣いているかのように。

苦しい命を宿したかのようなその音のなかで、雅之君は一人のホームレスがバンさんについて語っていたことをふいに思い出した。

「生きてりや、あんたと同じくらいになる息子さんがいたんだってよ」

そう聞かされた時、※雅之君はバンさんの息子さんの名前を知っていると思つた。だからもう、バンさんは他人ではないのだ。それなのに、自分はずっとここに来なかった。

怪物の泣き声に引張られるかのように、ゴミ溜まりと化した橋の下に雅之君は入っていった。陽光がさえぎられる。そのとたん、冷たく暗い、濡れた空気の塊が雅之君を呑みこんだ。

雅之君の足がまた止まった。

ここで暮らさなければいけない人たちの気持ちを、だれか本気で考えたことがあるのだろうか。雅之君はそう思つた。制度だとか、福祉だとか、そんなことじゃなくて、ここで暮らさなければいけない人たちの気持ちを。

父親が放つた、「盗み」という言葉。なぜかそれも思い出される。雅之君はこめかみのあたりにびりびりとした震えを感じた。盗みって……

ひよつとしたら、バンさんはなににひとつ盗めない性格だったからこそ、空き缶をつぶす人になつてしまったのではないか。

雅之君は残存物の横をゆっくりと歩いた。すると、ぶつかり合った流木の下に、ブルーシートの切れ端があった。流木と鉄のフェンスに挟まれ、ずたずたにちぎれて引つかかっていた。そしてその下には、透明なボウルが挟まっていた。

雅之君は腰をかがめ、ボウルを引きずり出した。そのあたりにはまだ泥水が溜まっていて、小魚たちが背を出してびちゃびちゃともがいていた。雅之君は何匹かをすくい取ってボウルに入れると、ゴミだらけの斜面を下りて流れまで運んでいった。母親の声が頭によみがえった。偽善、という言葉だった。

そうなのかもしれない。いや、きっとそうなんだと、雅之君は自分のことを思った。
 浅瀬の水にボウルごと浸すと、魚たちは泥を吐くように舞い、四方に散っていった。雅之君はしばらくボウルをそのままにしておき、水を張るようにして持ち上げた。濁り水がボウルで揺れている。自分の顔もゆらゆらと、そこであいまいに揺れている。

ふいに、込み上げてくるものがあつた。

ひどいのは父親でも母親でもない。橋の下で暮らす人たちの気持ちを考えない世間でもない。一番汚いのは、他人の知恵を黙って使い、短期留学までしようとしている自分だ。

「盗んだのは……僕だ」

それだけをつぶやくと、雅之君は息を殺して泣き始めた。

5 ボウルのなかの自分の顔に、涙が落ちていく。

※オブジェ……ここでは芸術作品のようなものということ。

※雅之君はバンさんの息子さんの名前を知っていると思った：以前、雅之君はバンさんの寝言で男の子の名前を聞いた。

問1 線A・B・Cの本文中の意味として最も適当なものを後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「まくし立てた」

ア 大きな声で不満をぶつけた

イ 激しい勢いで続けざまに言った

ウ 不機嫌そうに文句を言った

エ 何度も繰り返し言い聞かせた

オ 早い口調で詳しく説明した

B 「ささくれ立っている」

ア 現実の問題から逃げてばかりいる

イ すべてのことにやる気を失っている

ウ 気持ちが荒れてむしゃくしゃしている

エ 思い通りにならず悲しみに暮れている

オ なす術もなくおろおろしている

C

「まんじりともできない」

ア 心配でじっとしてられない
イ 恐ろしくて身動きがとれない
ウ うるさくて集中できない
エ いらいらして落ち着けない
オ 不安で少しも眠れない

問2

——線1「しばしの沈黙のあと、雅之君は答えた」とあるが、ここでの雅之君の気持ちを80字以内で説明しなさい。

問3

——線2「力なくうなずき、『もう会いません』と小さな声で答えた」とあるが、ここで雅之君はどのような気持ちを抱いているか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア パンさんをホームレスという状況から救いたいと思っている雅之君は、ホームレスになってしまふのを自己責任だと決めつける父親に怒りを感じているが、父親が高圧的な態度で約束を迫るので、どうすることもできないというむなしき気持ちを抱いている。

イ パンさんたちは決して盗みなどは働いていないと主張する雅之君は、ホームレスは泥棒だから一切近づいてはいけなと言ふ父親に嫌悪感を抱いているが、父親が高圧的な態度で約束を迫るので、何も意見を言うことができず残念な気持ちを抱いている。

ウ パンさんたちのことを理解したいと思っている雅之君は、ホームレスを生み出してしまふ時代への不満を口にするだけの父親を無責任だと思つたが、父親が高圧的な態度で約束を迫るので、何も言い返すことができずもどかしい気持ちを抱いている。

エ パンさんとの交流を続けたいと思つている雅之君は、ホームレスを悪人だと一方的に決めつけて見下している父親に憤りを感じているが、父親が高圧的な態度で約束を迫るので、とにかく父親の怒りから逃れたいという投げやりな気持ちを抱いている。

オ パンさんたちに親しみを感じている雅之君は、ホームレスになる人は一生懸命働かない怠惰な人だと一方的に決めつけている父親に反感を感じているが、父親が高圧的な態度で約束を迫るので、もうどうしようもないというあきらめの気持ちを抱いている。

問4

——線3「パンさんに教えてもらったものの見方を、技術として具体化する」とあるが、「技術として具体化する」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア パンさんから教えてもらったように、校庭の片隅でささやかに生きている雑草の根に無口な自分の姿を重ね、うまく表現できない自分自身の気持ちを植物の絵で表すことによって、全く新しい印象を与える植物の絵を描くこと。

イ パンさんから教えてもらったように、花や葉などの植物の華やかな美しさを描き出すだけではなく、地中に埋まっている根にも注目して植物全体をバランスよく描くことによって、全く新しい印象を与える植物の絵を描くこと。

ウ パンさんから教えてもらったように、花屋で売っているような美しく飾られた花ではなく、人目にふれず校庭の片隅に咲いているような雑草のたくましさを描くことによって、全く新しい印象を与える植物の絵を描くこと。

エ パンさんから教えてもらったように、一般的によく描かれる植物の美しい花や葉の姿だけではなく、普段は注目されない植物の根を中心にして細かな部分まで描くことによって、全く新しい印象を与える植物の絵を描くこと。

オ パンさんから教えてもらったように、花や葉の美しさを強調する芸術性に加えて、理科の資料図のような描き方で植物の細部をありのままに表現することによって、全く新しい印象を与える植物の絵を描くこと。

問5 — 線4「周囲のこの変化はとても大きな意味を持ち始めた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 以前は雅之君の絵は周囲の人々の関心をあまり集めなかったが、徐々に周囲からの評価が高くなっていった。その結果、雅之君にも自信が湧いて将来の夢や希望を持てるようになり、両親が反対していてもバンさんに会いに行こうと思うようになったということ。

イ 以前は雅之君が描いた絵を認めてくれる人は少なかったが、雅之君の絵を高く評価する人が段々と周囲に増えていった。その結果、雅之君はますます絵画に対する興味を深め、バンさんから教えてもらった以上の表現力を身につけていったということ。

ウ 以前は雅之君が絵を描くことを父親や母親は厳しく禁じていたが、両親も雅之君のすぐれた絵の才能に少しずつ気付き始めた。その結果、雅之君は両親から許しを得て、もう一度絵を習うためにバンさんに会いに行けるようになったということ。

エ 以前はホームレスのバンさんだけが雅之君を気にかけてくれていたが、孤立しがちだった雅之君にもクラスの中で少しずつ友達が増えていった。その結果、雅之君がバンさんから自立し、自分だけの力で未来を切り開けるようになったというところ。

オ 以前はホームレスのバンさん以外はほとんど雅之君の絵に興味を示さなかったが、周囲の人々からも雅之君の絵が高く評価されるようになった。その結果、雅之君も周囲の人々の期待にこたえて、絵画に人生をかけてみようと思うようになったということ。

問6 — 線5「ボウルのなかの自分の顔に、涙が落ちていく」とあるが、ここでの雅之君の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 両親のようにホームレスを犯罪者と決めつけるのではなく、彼らの気持ちを本気で考えなければならぬと思う一方で、結局は台風に襲われて行き場のないバンさんたちを救えなかった。そのことを自覚し、自分自身の甘さを反省する気持ち。

イ バンさんたちの気持ちを考えもせずに付き合いを禁じる両親の言うことに従ってしまった一方で、何一つ盗むことができないバンさんから絵画の技術を盗んでコンクールに入選してしまった。そのことを悔やみ、自分自身を許せない気持ち。

ウ ホームレスの人たちの気持ちを思いやることもない世間の人々とは違うつもりでバンさんから絵を習っていた一方で、バンさんと会うことを禁じる父親の言葉に従うしかなかった。そのことを恥じ、自分自身の勇気のなさを悔やむ気持ち。

エ ホームレスを犯罪者呼ばわりする両親とは違いバンさんたちの気持ちを理解しているつもりで親しくしてきた一方で、バンさんから教えてもらった技術を黙って使い高い評価まで得てしまった。そのことに気付き、自分自身を責める気持ち。

オ バンさんのおかげで金賞を取ったことを報告するためにバンさんに会いたいという気持ちがある一方で、父親や母親の顔がちらついてバンさんになかなか会いに来られなかった。そのことを後悔し、自分自身を情けなく思う気持ち。

問7 この文章について説明した次の各文の中から適当でないものを2つ選び、記号で答えなさい。

- ア ――線Ⅰ「受験勉強で目の色を変える同級生」という部分には慣用句が使われており、受験勉強に一生懸命と取り組んでいる同級生の様子を表現している。
- イ ――線Ⅱ「濡れた空気の塊が雅之君を呑みこんだ」という部分には擬人法（ぎじんぽう）が使われており、大型台風という自然の厳しさに抵抗する人間の力強さを表現している。
- ウ 本文では雅之君の回想の場面と、雅之君が多摩川河川敷を歩く現在の場面とが入り交じっており、過去と現在が交互（こうご）に描かれている。
- エ 多摩川周辺を襲った激しい台風や、その後の被害の様子などの情景描写は、バンさんたちが置かれた環境（かんきやう）の厳しさを表現している。
- オ 主人公を「雅之君」と表現するなど、作品全体をホームレスのバンさんの視点で描くことによって、雅之君やその周囲の人々の心情を温かく見つめている。

三 次の各文の――線のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ直しなさい。

- 1 親にコウヨウをつくす。
- 2 身のケツパクを明らかにする。
- 3 ソコウが悪いと注意を受けた。
- 4 ユウシュウの美をかざる。
- 5 雪を頂いた山々。
- 6 支出の内訳を確認する。

四 次の各文の——線と同じ漢字を使うものを後のア、エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 大切な仕事をイ任する。

ア 計画のイ細を説明した。

イ 敵に包イされる。

ウ イ質の文化にふれる。

エ 発言のイ図を考える。

2 争いが起こることは必シだ。

ア 代表者をシ名する。

イ 大ニュースがシ面をかざる。

ウ シ上の喜びを感じた。

エ 王者の座をシ守した。

問題は、これで終わりです。

受験番号

氏名（

）

「解答らん」

注意 上の＊のらんには、何も書かないこと。

＊

＊		
＊	＊	＊

＊		
＊	＊	＊

＊

＊

問 5	問 4	問 3				問 2	問 1	
							A	
							B	
								C

問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2				問 1	
									A	
									B	
										C

5	1						
		6	2				
				3			
						4	

1	
	2

二

三

四